

## 松本ボーンフォーラム報告

大学院硬組織疾患制御再建学講座 山下 照仁

(大学院および研究ユニットHP用・敬称略)

第10回松本ボーンフォーラムが2011年5月27日から5月28日に渡り、松本歯科大学創立30年記念棟大会議室「常念岳」を会場に行なわれた。新潟大学名誉教授・松本歯科大学元学長の小澤英浩、信州大学医学部整形外科教授の加藤博之、安曇野成人病診療研究所所長の白木正孝らを代表世話人として、帝人ファーマ株式会社のスポンサードにより開催された。



大会議室「常念岳」にてフォーラムが開催された。

本年度のテーマは、再生医療の基礎研究から臨床応用、骨関連疾患における病態マーカーや関与因子の同定、の二つが挙げられる。

最初のセッションでは、当大学病院で行なった顎骨再生医療の症例・歯髄細胞に見られる骨再生能力・硬組織再生における歯髄細胞のマーカーの同定をそれぞれ、口腔顎顔面外科学講座の上松隆司、口腔生化学講座の宇田川信之、口腔解剖学第2講座の細矢明宏らが報告した。また、帝人ファーマ創薬薬理研究所の山名慶は転写調節因子Zfp521によって骨量の調節が行なわれていることを、留学していた研究室の紹介を兼

ねて報告した。特別講演では、東京女子医科大学先端生命医学研究所の大和雅之により、細胞シート工学を応用した再生医療における臨床研究と現状についての発表が行なわれた。また、東京大学老年病科・抗加齢医学講座の浦野友彦は、骨粗鬆症に関連するマーカーとして LRP5 の SNP と GPR98 を取上げて骨量との関連を報告した。

初日の夜は、講演を終えた先生方、明日講演を控えた先生方、それぞれを囲んで、懇親会が行なわれた。アットホームな雰囲気の中、フロアでの質疑応答の続きをする方々、異分野の方との交流に花を咲かせる方々、毎年本フォーラムを楽しみに参加されている方々それぞれが、思い思いの形で満喫していた。



懇親会にて歓談する参加者の方々。

翌日のセッションでは、昭和大学歯学部口腔生化学教室の宮本阿礼が、ウイルス由来の二本鎖RNAである poly(I:C) が骨代謝に関わっていること、信州大学医学部運動機能学講座の荻原伸英が、カーボンナノチューブを含んだセラミックスと骨親和性の解析、松本歯科大学口腔顎顔面外科学講座の各務秀明が、再生医療における細胞製造の品質管理を欲しい機能を維持しつついかに効率よく行なうかなど、最新のトピックを報告した。湯河原厚生年金病院からは仲村一郎が、関節リウマチにおける骨粗鬆症との関連を長期間にわたるマーカー解析について報告した。特別講演では、北海道大学大学院歯学研究科硬組織発生生物学教室の網塚憲生が、骨細胞の骨組織内での分布を詳細に解析しその機能と骨形態との関連を新しい切り口で明らかにした。また、東京大学医学部附属病院腎臓内分泌内科の福本誠二は、FGF23 をめぐる最近のトピック

クスという形で骨ミネラル代謝との係わり合いを述べた。

本フォーラムでは、講演内容の充実度もさることながら、引続き行なわれる質疑応答に十分な時間を用意しており、演者と聴衆との議論が非常に活発である。特に本年度は、多くの聴衆の興味を引く内容が続き、2日目の質疑応答において大幅な時間超過をしてしまい、最後の発表を受け持った演者は危うく予定の列車に乗り損なうところであった。

本フォーラムが10回の大台まで続いてきたのは、研究者の飽くなき探求と、その結果に対する研究者の知識欲がうまく入り混じり、そこに新たなモチベーションが生まれる場を提供するという役割が達成できているからであろう。次回の松本ボーンフォーラムに期待しつつ、本報告をまとめてみた。